

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）  
平成30年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	企画・情報部企画課 主任
	氏 名	山下 彩佳
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	ドイツ連邦共和国
	研 修 先 機 関 名	京都大学欧州拠点
	研 修 期 間	平成30年4月4日～平成30年9月25日
具体的な研修内容	<p><b>1. 教育活動の支援</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボン大学留学フェアにてブース出展を行い、約40名の来訪学生に対して主に本学の交換留学制度についての質問に答えた。英語で実施する専門科目の需要が高かった。</li> <li>・HeKKSaGOn加盟大学から本学へ留学予定の学生を主な対象として渡日前説明会を開催し、本学や本拠点、京都での留学生活に関する情報提供（プレゼンテーション等）を行った。</li> <li>・拠点を来訪する本学への留学希望者に対して随時、留学制度や指導教員等に関する情報提供を行った。</li> <li>・協定校における Erasmus+等留学施策に関する情報収集を行った。欧州では現在西バルカン地域との関係強化に力を入れており、対日本には予算が付きにくい状況である。</li> <li>・ジュネーブにて開催された EAIE Conference 2018 にてブース出展を行い、協定校等海外の大学の担当者と打合せを行った。直接顔を合わせることで、保留となっていた協定締結案件がかなり進捗した。また書記として報告書案の執筆を行った。</li> <li>・本学学生の欧州への渡航状況について調査し、欧州地域への短期派遣プログラム（サマーコース等）の開拓支援について検討を開始した。</li> </ul> <p><b>2. 研究活動の支援</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ハンブルク大学との共同シンポジウムに関する打合せに同席し、研究者交流に関する要望聴取や本拠点で実施可能な支援についての検討を行った。第三者が研究者交流の橋渡しをするという現場に初めて立ち会い、大学として研究者支援のあり方を考えるよい機会となった。</li> <li>・DFG において競争的資金に関する情報収集を行った。申請手続の具体的な流れや申請に際しての事前相談の重要性、小規模でも応募しやすい補助金の情報等を得ることができた。</li> <li>・日独ジョイントレクチャーを開催し、事前準備や当日の運営を行った。特に10回目の開催ということで従前よりも広報に力を入れ、欧州の他大</li> </ul>	

学・高等教育機関への案内状送付や新聞広告掲載等を今回新たに行った。

- ・ベルリン自由大学を訪問し、ドイツ語圏日本研究者会議についての情報収集を行った。担当者との最初のコンタクトに苦戦したが、ウェブサイトに掲載されている電話番号に電話してみることでアポイントメントが取れ、実際に本拠点から会議にブース出展する運びとなった。今までは留学フェア等学生向けのイベント出展が多かったが、学会への出展という新たな試みを行うことができ、今後の活動に繋がる手応えを感じた。

- ・本学の教員と共にフランクフルトにて開催される日本映画祭「Nippon Connection」の担当者と今後の協力の可能性について打合せを行った。本学の各部局やハイデルベルク大学を巻き込んだブース出展など具体的なアイデアが出され、これも実現できれば今までに無い取り組みとなる。

### 3. 広報・社会連携・ネットワーク形成

- ・カールスルーエ工科大学の年次記念式典や高山佳奈子法学研究科教授のフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞受賞記念昼食会に招待され、参加した。お祝いの席では協定校や本学関係者、財団関係者等と打ち解けて情報交換をすることができ、今後の連携強化に繋がるとも充実した時間を過ごした。数字や文字として成果が表れなくとも重要な業務の一つだと感じた。

- ・シュタムティッシュ（交流会）を開催し、ジョイントレクチャー講師や参加者、近隣の語学学校に通う日本人学生、日本人研究者や、日本に留学予定のドイツ人学生ら、幅広い層からの参加があった。意外とハイデルベルクに日本人が多いことに気付き、今後何らかの協力関係に繋げることも考えられる。

- ・拠点所長交代の挨拶状を協定校等関係機関にジョイントレクチャーの案内と共に発送した。長年更新されていなかった学長名等を今回総点検し、少なからず返信があったので、カウンターパートの連絡先のアップデートに役立った。

- ・拠点ウェブサイト、拠点 Facebook の更新、欧州拠点ニュースの配信を行った。ウェブサイトにはインタビュー記事も2件（研究者、学生）日本語と英語で執筆した。このことにより、**教職員・学生の国際化推進**にも資することができた。また、Facebook には簡潔でキャッチーな記事を書き、各記事の読者層を想定した効果的な文書作成について考えるよい機会となった。

### 4. その他総務・経理的業務等

- ・拠点活動報告の作成、海外拠点連絡会での発表、旅行伺の作成、出張報告書の作成、立替払請求、飲食費支出伺等の作成、宿舎の家賃支払い手続

	<p>き等を行った。</p>
<p>本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック</p>	<p>私が今回の研修で得たものは、人との出会いに尽きる。同僚となる URA とは今回初めて一緒に仕事をしてみて、とても興味深い業務内容だと思った。普段事務職員と URA が接する機会は少ないが、教員、職員、そして URA が一体となって大学全体を見渡した業務を行う事の重要性を感じた。</p> <p>そしてドイツに滞在中の本学教員。普段京都ではほとんど事務的な話しかしないが、海外だとフランクに話をする機会が多く、刺激的だった。特に拠点で出会った教員・研究者の自分の専門分野に拘らず幅広く興味を持ち、新しいアイデアに溢れ、積極的に取り組む姿が印象的だった。また、そんな教員のアイデアを実現すべく、他の教員との共同研究や学内外で実施するイベントに繋げるなど、URA と共に具体化に向けて考えることがとても楽しく有意義であった。流行語のように「学際」や「分野横断」と言われて久しいが、それを肩肘張らずに自然と実行できる環境は、今後の大学にとって重要なことだと思う。</p> <p>ベルリンへの出張時には、面識のない人たちに対して苦労しながらもアポイントメントを取ったが、そうやって新しく出会った日本の新聞社の方たちからは今まで拠点としても知り得なかった在独日本メディアの活動方針や内容について知ることができたし、ベルリン自由大学で出会った教員を通してドイツ語圏日本研究者会議へのブース出展にも繋がった。</p> <p>本学の職員は限られた組織の中の限られた人間関係の中で終結する業務を行っている者がほとんどであるように思う。上記の通り、私は半年間の研修期間中に様々な経験を通じて今後に関わる業務に携わることができたが、私には今後を見届けることはできない。学外に向けた国際化の前に、学内の部署間の垣根を低くすることも重要であるように感じた。</p> <p>また、本学の職員は基本的に前例を踏襲することが推奨され、新しいことに対しては慎重である。面白そうなアイデアをどうやって実現するのか。どの部署の誰に働きかけて、どうやって説得するのか。そのための材料をどう準備するのか。そういったことを筋道立てて考える力を少しは養えたと思うので、今後はいいと思ったことは臆せず前に進めることができるよう、尽力していきたいと思う。</p> <p>そして私の理想は、国際と名の付く部署が全て無くなり、相手が海外であろうと国内であろうと全て同じように取り組むことができる大学の実現である。大切なのは「国際化」と言うよりも「ボーダーレス化」だと思っている。</p>